

ドン・キホーテ 名場面集

～前篇第8章～「風車の冒険」

そのとき二人は、野原の行く手に立ち並んだ三十から四十の風車に気づいた。ドン・キホーテはそれを目にするやいなや、従士にむかって、こう言った――



馬もその乗り手もそっくり翼にさらわれて……

ギュスターヴ・ドレ画



「友のサンチョよ、どうやら運命の女神は、われわれがのぞんでみたよりもはるかに順調に事を運んでくださるとみえるぞ。ほら、あそこを見るがよい。三十かそこらの途方もなく醜怪な巨人どもが姿を現したではないか。拙者はこれから奴らと一戦をまじえ、奴らを皆殺しにし、奴らから奪う戦利品でもって、お前ともども裕福になろうと思うのだ。というのも、これは正義の戦いであり、かくも邪悪な族を地上からおいはらうのは神に対する立派な奉仕でもあるからだ。」

「どこに巨人がいるだね？」と、サンチョ・パンサが訊いた。

「ほら、あそこに見える長い腕をした奴らじゃ」と、主人が答えた。

・・・「しっかりしてくだせえよ、旦那様」と、サンチョが言った。「あそこに見えるのは巨人なんかじゃねえだ。ただの風車で、腕と見えるのはその翼。ほら、風にまわされて石臼を動かす、あの風車ですよ。」

(「ドン・キホーテ前篇 (一)」

牛島信明訳より 第8章抜粋)

～後篇第 19, 20, 21 章～

「カマチョの婚礼－キテリアとバシリオの恋物語」

美女キテリアと許婚バシリオの間に金持ちのカマチョが入って美女を奪います。婚礼の日、バシリオは剣で胸を突くという狂言を演じて美女の愛を取り戻しました。

(「ドン・キホーテ・デ・千秋」より)



ミンクスのバレエ
「ドン・キホーテ」



～盛大な婚礼の舞台～

折りしも日が暮れかかっていた。しかし一行が村に着く前から、彼らの目には村のあたりの空一面に、きらきと輝く数限りない星がちりばめられているように見えた。しかもそこに、笛、小太鼓、手持ち豎琴（サルテリオ）、リコーダー、タンバリン、ティンブレルといったさまざまな楽器の渾然一体となった心地よい楽の音が聞こえていた。・・・音楽に打ち興じていたのは婚礼を祝福する者たちで、いくつかのグループに別れた彼らは、あるいは踊り、あるいは歌い、はたまた上で述べたような楽器をかなでながら、その快適な場所を動き回っていた。

(「ドン・キホーテ後篇（一）」 牛島信明訳より 第 19 章抜粋)

～後篇 第26章～

「ペドロ親方の人形芝居」

ドン・キホーテはある宿屋で旅芸人ペドロ親方の人形劇を観る機会に恵まれた。出し物は「メリセンドラの救出」というもの——モーロ人の城に囚われの身になっていた貴婦人メリセンドラを、彼女の夫ドン・ガイフェーロスが助け出して馬で逃げると、そのあとをモーロの大群が追いかける。ところが、これを観て激昂したドン・キホーテは、異教徒から弱きを助けるは騎士の義務とばかり、人形に向かって刀を振りまわし、舞台と人形をめちゃめちゃに壊してしまう。

(「ドン・キホーテの旅」より)



ファリャのオペラ

「ペドロ親方の人形芝居」第2幕のスケッチ



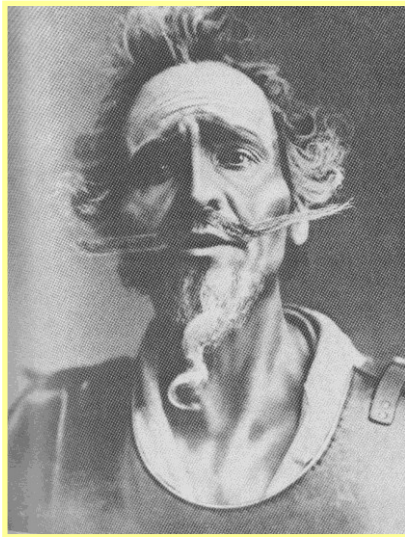
「やあやあ、拙者がこの世にある限り、拙者の目の前で、ドン・ガイフェーロスのごとき音に聞こえた騎士、豪胆きわまる恋慕の騎士に狼藉が加えられるのを見過ごすわけにはまいらんぞ。さあ、止まるのだ、ここな素性のいやしきごろつきども！あとを追ってはならぬ、追跡いたすでない！拙者の言うことが聞けぬとあらば、ここで拙者と一線を交えるほかないのじゃ。」

(「ドン・キホーテ後篇(二)」 牛島信明訳より 第26章抜粋)

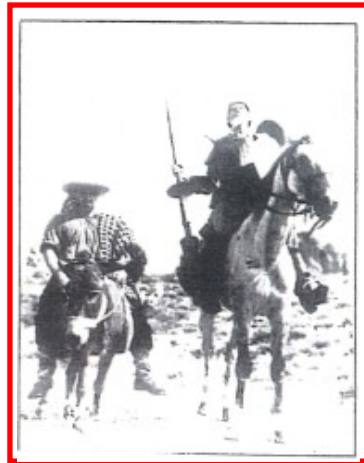
～後篇第 74 章～「ドン・キホーテの最期」

＜銀月の騎士＞に決定的な敗北を喫したドン・キホーテは故郷に帰り、病の床で狂気から覚めて善人アロンソ・キハーノに戻る。そして遺言を終え、ついに最期を迎えるのであるが、それを知ったサンチョの腫れた臉からは、涙がどっと堰を切ったようにあふれ出す。

(「ドン・キホーテの旅」より)



ドン・キホーテに扮した
シャリアピン



「友のサンチョよ、どうか赦しておくれ。この世に遍歴の騎士がかつて存在し、今も存在するという、わしのおちいっていた考えにお前をおとしいれ、わしだけでなく、お前にまで狂人と思われるような振舞いをさせて本当にすまなかった。」

「ああ、旦那様！」と、サンチョが泣きながら叫んだ、「どうか死なねえでくださいよ。それより、おいらの言うことを聞いて長生きしておくんなさい。いいかね、おいらの大事な旦那様、この世で人間のしでかす一番でかい狂気沙汰は、別にたいした理由もなければ誰に殺されるってわけでもねえのに、ただ悲しいとか侘びしいとかいって死に急ぐことですよ。さあ、お前様、そんなにぐったりしてねえでベッドから起きあがり、前に話し合ったとおり、羊飼いの格好をして野原に出かけようじゃありませんか。そうすりゃあ、魔法を解かれた、それはそれは美しくて豪勢なドウルシネーア姫が、どっかの草むらからひょっこり姿を現わさねえとも限らねえよ。・・・」

・・・「たしかにわしは狂人であったが、今では正気に戻っている。つまり、ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャであったのが、今では、先にも言ったように善人アロンソ・キハーノになっているのです。ですから、わしの衷心からの悔悟の念に免じて、今はあなたがたがわしを、また以前と同じように評価してくれることを願うばかりです。・・・」

(「ドン・キホーテ後篇 (三)」 牛島信明訳より 第 74 章抜粋)